T・G 体育会の歩み

学生課 高橋嘉男記

体育会が創設されてから本年で十七年目を迎え、その陣容は三十部七同好会となり、会員数は一、三〇〇名を越えるまでに発展している。

ここで体育会の今日の隆昌をもたらした歩みと若干の問題点について体育会年表を通して考えてみたいと思う。

体育会が創設されたのは昭和二十四年であった。それまでの大学スポーツとしての課外体育は現在と同様、その活動はきわめて盛んであった。

しかし戦後まもないことでもあり、すべてが荒廃していたし、まして現在のような体育館もなく、運動場も整備されたものではなかった。そんな環境のもとでの課外体育活動では活動そのものは活発であっても、各部間の横の連絡がなく、施設、設備の充実等の実現には全く無力であった。

そこで各部の横の連絡を密にし、互に助け合い、励まし合って親睦をはかり、結束をかためることが必要となり、今日の体育会の基盤となったのである。

このようにして基盤の確立した体育活動は体育会年表にみられるように、各種大会、また各分野においての隆昌を見るに至ったのである。

勿論、前述の基盤よりここまで到達するには大きな努力があったことは見のがせない事実である。

まず第一に、基盤は出来たが、体育会組織をいかにすべきかということであった。

前述したごとく、体育会結成以前の運動部活動はたしかに盛んであり、また各種大会にも積極的に参加し、優秀な成績を収めたことは事実であったが、しかし、運動部全体がまとまって、一つの目的に向って前進するという学生自治活動の発展のためにはどうしても体育会という中枢機関、統一機関が必要になったわけです。

この必要性を満たすために、体育会結成の際、先輩大学であった立教大学・早稲田大学を訪ね、体育会の組織について調査、研究し、資料を検討し、「東北学院大学体育会」の正常な運営にはどのような組織にするかを体育会結成の目的に対比して考えたところ「立教大学体育会」型の形式をとることになった。

（当時の体育会組織として大別して二つの型があった。即ち、「早稲田大学体育会」型と「立教大学体育会」型である。

両者とも戦後の大学スポーツは保健体育という正課の発展的段階として課外体育（運動部）と一般体育（一般学生の課外スポーツ）が生れたという考え方においては同じであるが、運営の方法において相異がある。

即ち、「早稲田大学体育会」型は学内体育（正課・課外・一般）に関しての一切を大学機構の中にくみ入れ、管掌するという体育の一元化を計ったものである。

他方「立教大学体育会」型の課外体育の分野に課外活動として学生の自主的活動であり、学生の手によって運営されているものである。

勿論、これらの二大別は当時の考え方であり、現在の考え方とは多少異なっていることを付記しておく。

第二に学外との親睦を計ることによっての技術の練磨のための交流をもつことであった。

その為に青山学院大学と交流をもった。

青山学院大学との総合定期戦は昭和二十五年に開始された。その目的は「両校の建学の精神にもとづき、体育活動を通じて心身を練磨し、両校の発展に寄与し、体育文化の高揚に努めるとともに、健全なる学生スポーツの担い手となることにある。

この定期戦を結ぶためには、当時体育会が創設されたばかりであり、各部の横の連絡を密にし、やっと体育会の運営が軌道にのったばかりであったので、種目の決定やら、実施方法、運営方法についての問題について当時の体育会の学生が如何に努力し、苦労したかは想像にかたくない。

次に体育会の活動面の経過について述べてみたいと思う。

一、青山学院大学 総合定期戦

青山学院大学との総合定期戦は昭和二十五年青山学院大学において開始されて以来、一年毎に当番校となり、本年で第二十回目を迎える。その間の対戦総合成績は本学の四勝十五敗である。（昨年の第十九回大会まで）対戦種目数も開始されたばかりの第一回戦が七種目であったが、現在ではオープン戦を加えて十九種目となり、前述の定期戦の目的と交流の意義が回を重ねるにつれて再認識され、益々発展している。

昨年の第十九回定期戦はオープン戦を含め十七種目に熱戦を展開し、本学の四勝十三敗で総合優勝は逸したものの、内容は実力伯仲で今後が期待される。

二、対北海学園大学 総合定期戦

北海学園大学との総合定期戦は昭和三十年札幌において第一回が開始された。

当時北海学園大学新聞会編集長宮崎氏の発案であり、昭和二十九年にこの案をもって北海学園大学補導部長であった三森先生が来学され、是非定期戦を結んで欲しいとの強い要望を受け、スポーツを通しての両校の親睦をお互いの心身の練磨の中につちかわれる人間性を発展させる意味において、意義があるとの見解が成り立ち、両大学学長間で正式に文書の交換があり結ばれたものであった。

しかし、当時本学においては青山学院大学との定期戦や、東北地区大学総合体育大会等の行事があり実施時期の点や、又地理的、経済的な面でも負担があまりにも多すぎるという問題があり、定期戦反対の声もあった。

その後定期戦の回を重ねるにつれて困難な面が克服せられ、今日に至っている。

この定期戦も今年で第十五回を迎え、青山学院大学との定期戦と同様、一年毎に当番校となり、種目数は開始時は八種目であったが年々ふえて、現在ではオープン戦を含んで十四種目となり、技を競い合っている。

対戦総合成績は本学の十四連勝（昨年大会まで）という輝やかしい戦績だが、北海学園大学も年々本学に迫りつつあり、今後の活躍が期待される。

三、東北地区大学 総合体育大会

この大会は文部省の主催で行なわれるもので、昭和二十五年より開始され、種目数は十九種目で、参加大学は東北地区国公私立大学二十七校、参加人員約四、〇〇〇名の多きをかぞえ、本年で第二十回を迎える。

この大会の主旨は「各大学の体育団体を統轄して、学生相互の親睦と団結を図り、スポーツ精神に則って学生にスポーツの普及を計り、その発展に寄与することにある。

運営は東北地区大学体育連盟規約並びに東北地区大学総合体育大会規約にもとづき、東北地区の国立大学が主管校となり実施されているが、第十九回大会まで本学は連続総合優勝を飾っている。まさに東北地区大学の雄と自他ともに認めている。

最後に本大学体育会に対し若干の問題点を指摘してみたいと思います。

一、体育会創設時の基盤になった体育会内部の各部間の横の連絡を密にするとの願いが現在十二分に行なわれているかどうか。

このことは今後も忘れてはならないことであろう。

二、一般学生より遊離してはいないか。

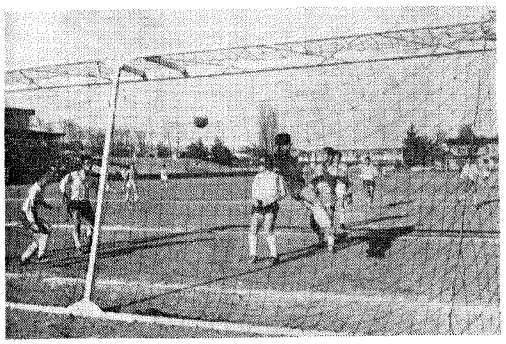
確かに体育会は年一回体育祭を主催し、一般体育の振興につとめているが、前述の両定期戦の際に一般学生の応援等の参加が少ない。（全学的な行事なのに。）

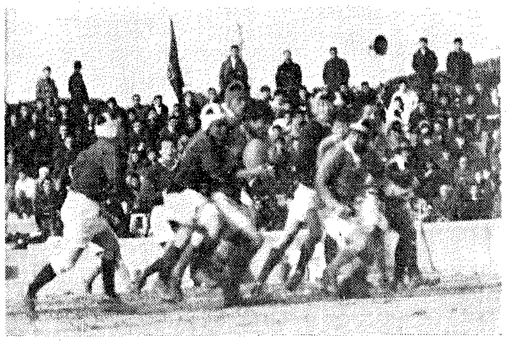
これらの問題点を大学一体となって考えてみる必要があり、体育会創設の本質にたちかえって今後一層の発展を期待するとともに本体育会に対し絶大なる御協力、御指導のほどをお願いしてペンを擱きます。

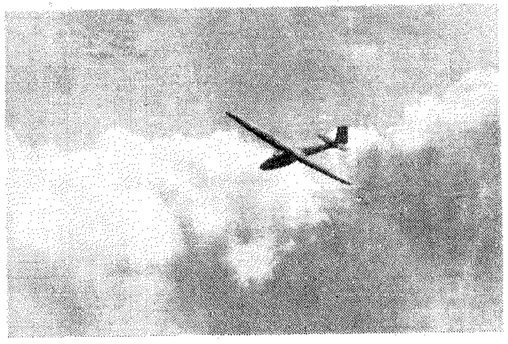
体育会年表

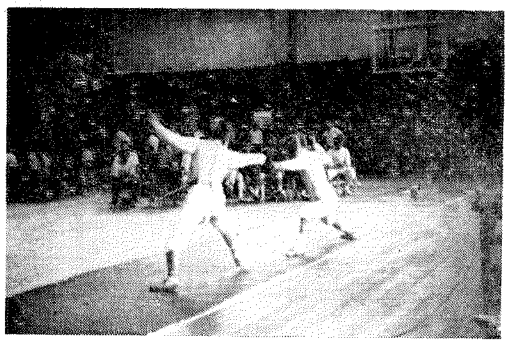
年	部名	体育会歴史
大正八年	陸上競技	部創設
	硬式野球	神学校時代アマチュアクラブとして誕生
九年	柔道	部創設、部長梶原長太郎（南町神学部雨天体操場に寄宿舎の畳三十枚を譲り受け道場に使用した）
十年	サッカー	宮城師範に畑山教諭が赴任して一中、二中、学院に普及する
	硬式野球	部として発足
十三年	柔道	第一回全国高等学校専門部柔道大会
十四年	柔道	第二回全国高等学校専門部柔道大会
	サッカー	千葉幸雄部を創設
十五年	サッカー	学院専門、東北大、二高、高等工業その他でリーグが結成 学院千葉幸雄、早坂を主軸に発展の道をたどる
昭和二年	サッカー	東北選手権大会決勝戦学院専対東北大延長三回二時間四十分の大試合で二—一で学院専が勝 学院専、東北大混成チームで仙台サッカーを組織、中央進出の第一年である
	水泳	部創設
三年	サッカー	第一回東北学院—青山学院定期戦
六年	ラグビー	部発足 公式戦、第一戦、北海道遠征
七年	サッカー	学院専門部主催の第一回北日本中学校大会が開かれ、戦争始まるまで続く
九年	ラグビー	第一回青山定期戦
十三年	サッカー	岩崎玄が近代的基礎練習法と三Bシステムを指導
十四年	航空	宮城工業株式会社社長宮場賢郎氏が東北学院中学部に伊藤式プライマリーを寄贈、これに専門部有志は同好会として参加、ここに航空部の母胎が培かわれた。
十五年	山岳	部創設、部長酒井教授、二宮教授、大沼、常盤両氏らにより創設
	航空	福田兼春氏は有志と共に玉田勇先生を部長として正式に発足した。部員三十名
十八年	サッカー	第十四回北日本高専校大会決勝戦北大予科—学院専の試合が前半一—一で北大リードで終った時、戦時態勢下「一球技一切廃止」によりグランドに乗り込んだ役人によって即時中止を命ぜられ劇的な幕となる。
二十年	航空	占領軍による武装解除により我部所有のグライダー三機破棄焼滅させられ、ここに事実上戦前の活動は終りを告げた。
二十一年	サッカー	畑と化したグランドのもとで復活、全国専門学校大会優勝
	バレー	部創設
	空手道	同会創設、富岡照主将
二十二年	野球部	全日本優勝
	サッカー	全国専門学校大会優勝 仙台のベスト・チームとしてOBを主体とする仙台サッカー編成
	山岳	部再建
二十三年	サッカー	第三回国体仙台サッカー一般の部で準決勝進出
	野球部	全日本準優勝
	空手道	部昇格
二十四年	サッカー	第四回国体仙台サッカー五位 新制大学大会学院大準決勝進出
二十五年	ボクシング	部発足
	サッカー	第五回国体仙台サッカー三位
	バスケット	復活、部創設
	準硬式野球	部創設
	バレー	青山定期戦始まる
	レスリング	部創設、主将浅見万平
	ラグビー	青山定期戦始まる
	ボクシング	全日本選手権決勝進出
二十六年	サッカー	学院大 中大定期戦始まる
	バスケット	青山定期戦始まる
	柔道	部再興
	ヨット	同好会創設
二十七年	柔道	東北学生柔道連盟加盟
	レスリング	東日本学生王座決定戦初参加
	航空	部発足
二十八年	柔道	新道場落成
	硬式庭球	部発足
		対青山学院大学定期戦開始 対東北大定期戦開始
	レスリング	対秋田大定期戦開始
	ヨット	部昇格
二十九年	バスケット	明治大学招待試合
	バドミントン	同好会発足
	フェンシング	同好会発足
	ハンドボール	同好会発足
三十年	サッカー	全日本選手権でベスト・エイト進出
	準硬式野球	第十回国民体育大会優勝
	硬式庭球	対北海学園大学定期戦開始
	バレー	東北学生選手権開始
		北海学園定期戦開始
	山岳	蔵王 島の沢にTGヒュッテ「栄光」完成
	バドミントン	部に昇格
	フェンシング	部に昇格
	剣道	宮城・山形・福島三県大学剣道大会開始
	弓道	同好会発足
	剣道	同好会発足
三十一年	サッカー	全日本大学学生選手権決勝
	準硬式野球	第十一回国民体育大会第三位
	山岳	五月山岳部創設以来初めての遭難者を出す。渡辺氏死亡
	フェンシング	青山定期戦オープン戦として開始
	ワンダーフォーゲル	同好会発足
三十二年	柔道	全日本キリスト教関係大学柔道
	剣道	部昇格
		青山定期戦復活
三十三年	準硬式野球	第十回全日本大学選手権大会優勝 全日本大学王座決定戦優勝
	柔道	宮本理吉現六段師範となる
	レスリング	秋田実業団定期戦開始
	準硬式野球	第十回全日本大学準硬式野球大会優勝 全日本大学準硬式野球王座決定戦優勝
	空手道	第一回東北空手 選手権大会 全日本選手権大会第三位
三十三年	バドミントン	対北海学園定期戦開始
	ハンドボール	部に昇格
三十四年	硬式庭球	北大オープン戦開始
	フェンシング	青山定期戦公式試合となる
	弓道	部に昇格
	ワンダーフォーゲル	部に昇格
	自動車	同好会発足
	相撲	同好会発足
三十五年	ハンドボール	全日本選手権ベスト5に残る
	自動車	部に昇格
	スキー	同好会発足
三十六年	サッカー	第七回全国大学選手権ベスト8進出
	柔道	野間記念道場落成
	レスリング	部昇格十周年記念行事を行なう
	空手道	全日本空手道選手権大会個人戦野村初段全日本5位 都道府県対抗第5位
	ヨット	国体S級決勝進出
	相撲	第四十四回東日本学生選手権大会第九位
		第三十九回全国学生選手権大会優秀十六校進出
三十七年	空手道	全日本選手権大会準々決勝進出
	フェンシング	対東北大定期戦開始
	航空	庭郷徳夫氏二十三Bソアラーを[illegible]高度一千六百七十三メートルの公認高度記録を達成
	相撲	第四十一回東日本選手権第九位
	合気道	同好会発足
	射撃	同好会発足
三十八年	空手道	全日本空手道選手権大会第四位
	ヨット	全日本学生個人選手権大会A級五位
	航空	全日本学生グライダー選手権大会高度二千四百五十メートルで文部大臣杯獲得
	剣道	野間記念剣道場新築落成
	ハンドボール	全日本学生選手権大会に於いてベスト8に残る
	スキー	部昇格
	ホッケー	同好会発足
三十九年	バレー	全日本学生選手権大会決勝トーナメント四回戦
	フェンシング	北海学園定期戦オープン戦として開始
	航空	全日本学生グライダー選手権大会滑空部門、高度部門において優勝
	サイクリング	同好会発足
	ゴルフ	同好会発足
四十年	サッカー	全日本大学学生選手権大会ベスト8
	フェンシング	全日本大学学生選手権大会エペ第三位
	航空	全日本大学学生選手権大会優勝
	弓道	第十二回全日本学生選手権大会優勝
	合気道	部昇格
	射撃	部昇格
四十一年	山岳	ヒマラヤ遠征成功成る
	卓球	全国ベスト8成る
	馬術	同好会発足
四十二年	小林寺拳法	同好会発足
	準硬式野球	沖縄遠征
	航空	全日本大学学生選手権大会優勝
	射撃	全日本大学学生選手権大会個人優勝
	卓球	全日本大学学生卓球選手権大会個人優勝
	フェンシング	全日本学生フェンシング選手権大会四位
	スキー	青山学院大学定期戦オープン戦として開始
四十三年	ボート	部昇格（三十九年発足）
	アイスホッケー	北海学園大学定期戦オープン戦として開始
	相撲	全日本学生選手権大会にてベスト10
	航空	北日本学生グライダー競技大会にて優勝
	ボート	北日本大学選手権大会優勝
	ラグビー	全国大学対抗ラグビー大会にてベスト4

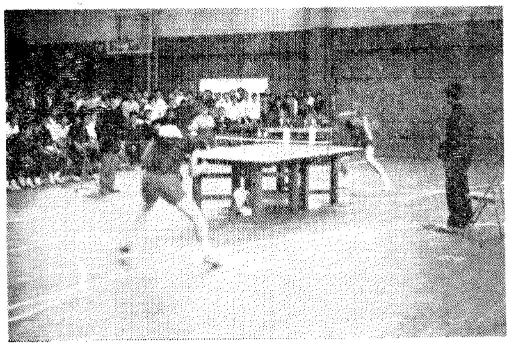
山岳部 —ヒンズークシ登頂に成功—

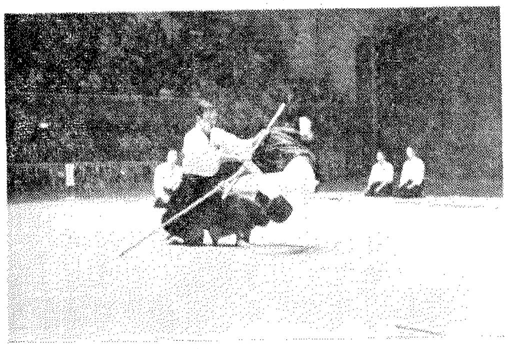

サッカー部


ラクビー部


航空部


フエンシング部


卓球部


合気道部